

図書館だより



2019年
6月号

2019年6月7日発行



熱戦が繰り広げられた体育大会が終わりました。みなさんにとって思い出に残る1日となったと思いますが、私も先生方が参戦された競技や色別対抗リレーの盛り上がり、応援パフォーマンスや部活動リレーの工夫を凝らした演出など、応援席から楽しませていただきました。そして今年も3年生の集団演技には感動で胸がいっぱいになりました。

スポーツの祭典といえば、2020年東京オリンピックのチケットの抽選申込みが先月行われました。抽選結果は今月20日ということですが、みなさんは開会式や閉会式、競技の観戦に申込みしたでしょうか。開催中の東京は大変な賑わいになりそうで、人混みに不安を覚えますが、せっかくの日本開催のオリンピックですから、観に行ってみようという気持ちが起こります。まだチケット購入のチャンスはあるので、じっくり考えてみるのもよいでしょう。

速いだけでは勝てない

782-サ 『夏から夏へ』 佐藤 多佳子 || 著 集英社

リオオリンピックで銀メダルを獲得した男子4×100mリレー。リレーは速く走るだけでは勝つことができない、速さを失わず、確実にバトンを繋げることが肝心の競技です。この本は、陸上に青春をかける高校生を描いた小説『一瞬の風になれ』の著者 佐藤多佳子さんが2007年の世界陸上から2008年の北京オリンピックに向かう日本代表チームに密着したノンフィクションです。リレー走者はどんな思いやどれほどのプレッシャーを抱えて、トラックを駆け、バトンを繋いでいくのが、まるで自分が選手になったかのように鮮明に浮かんでいきます。次のオリンピックでも目が離せません。

オリンピックまでに英語で日本を紹介できるようになろう

837-ア 『英語で日本のしきたりと文化を伝える本』 荒井 弥栄 || 著 二見書房

現在、日本へは世界各国から旅行者が訪れています。みなさんも街で道や電車の乗り方を尋ねられた経験があるかもしれませんが、日本にいながらも英語を使う機会というのは今以上に増えていくでしょう。会話の中では日本の文化を伝える機会もあると思います。その時にはスマートに日本を紹介して、おもてなしの心を伝えたいですね。その一歩をこの本で踏み出してみませんか。日本のマナー、文化、しきたりごとに日本語と英語で説明されているので、日本の文化を英語でどう伝えたらよいかを学べるだけでなく、自分自身が日本をもっとよく知る絶好の機会にもなります。

🏆 令和元年は、太宰治の生誕110周年の年 🏆

今年の誕生日(6月19日)で太宰治は生誕110年を迎えます。これを記念して彼の故郷である青森では『太宰治生誕110年記念フェスティバル』や『太宰治展 一生誕110年』など様々な催しが行われます。また彼の代表作のひとつである『人間失格』が監督 蜷川実花×主演 小栗旬で映画化(9月公開)されたり、ダイナミックなリメイクで劇場アニメーション化されたりと今年は太宰治の文学に改めて触れてみるよい機会です。ここでは、どの太宰作品から読もうか迷った時の参考になる本を紹介します。

910.2-ダ 『若いうちに読みたい太宰治』 齋藤 孝 || 著 筑摩書房

太宰治の作品は『心の中の深さがちょうど10代に合っている』と教育学者である齋藤孝さんは言います。この本では、『こんな気分の時には、この作品がおすすめ』という形で多感な若者たちへおすすめする太宰作品が紹介されています。作品に込められた太宰治の思いや物語の見どころがわかりやすくまとめてあり、自分の思いと重なる作品や太宰治のイメージが変わる作品など色々と興味を引かれるものと出会えます。作品を読む前の予習として使うのにもちょうどよいです。

910.2-ダ 『太宰治の絶望読書』 豊岡 昭彦 || 編 WAVE出版

『恥の多い生涯を送ってきました』(『人間失格』より)、『ああ、人間の生活って、あんまりみじめ』(『斜陽』より)など、太宰治の作品に登場する後ろ向きだけど、何かいつまでも心に残ってしまう印象的なフレーズを集めた本です。一見すると暗い感じるフレーズも、どんな話の展開からこの言葉が生まれたのだろうと、全貌を知ることによって印象が変わるかもしれません。気になるフレーズを見つけたら、次は本編も読んでみましょう。

🌳 図書館司書の「今月はこの本を読みました」 🌳

高校時代、本好きの友人と立ち寄った図書館で、偶然出会った本『ちいさなちいさな王様』(943-ハ ア クセル・ハツケ || 作 講談社)をひさしぶりに読みました。表紙を飾る王様のまんまるなシルエットと、得意げな表情が何とも可愛いこの本には、主人公の僕と、ある日、ふらりと部屋に現れたちいさな王様の交流が素敵な挿絵付きで描かれています。王様は『十二月王二世』と言い、グミベアーが大好きです。気まぐれで、怒り出すと、僕のコーヒーに角砂糖をいくつもぶち込んでしまう王様だけど、仕事に追われ、子どもの頃のように自由な発想で想像を膨らませる心を失いかけていた僕に、色々なことを感じさせ、気づかせてくれます。高校生の頃は「王様、可愛いなあ〜」と、ほのぼの読んでいましたが、大人になった今読むと、「王様が言うような考え方って、いつの間にかしなくなっていたな」と主人公の僕のように凝り固まっていた思考をほぐしてもらえたように感じました。いくつになっても自由な心を持って生きたいものです。【今井】

★先生がプロデュース!! 今月の展示★

今月の展示は…、国語科 高橋 優美花 先生がプロデュースです😊

展示のテーマは…、【「私」と他人(あなた)】です。

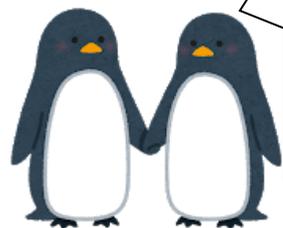
かつて何の会話の弾みか、友人がこんなことを言った。「私以外の人にも、心ってあるんだね」と。あるよ！と声を大にして言いたい。他人にもその人だけの悩みや考え方があるのだ。

しかし、時折私たちは自分のことでいっぱいになって、それを忘れがちだから、時に意識して「君、何考えているの？」と、他人の脳内をのぞき込む気持ちで読書も良いかもしれない。

◆展示本リスト◆

- 914.6-ア 『学生時代にやらなくていい20のこと』 朝井 リョウ || 著 文藝春秋
914.6-ア 『倒れるときは前のめり』 有川 浩 || 著 KADOKAWA
914.6-ホ 『もしもし運命の人ですか』 穂村 弘 || 著 メディアファクトリー
914.6-ニ 『まにまに』 西 加奈子 || 著 KADOKAWA
914.6-ナ 『不思議な羅針盤』 梨木 香歩 || 著 文化出版局
289.1-ナ 『卒業式まで死にません 女子高生南条あやの日記』 南条 あや || 著 新潮社
- 913.6-コ 『ファミリーシークレット』 柳 美里 || 著 講談社
→深く深く筆者の内面を掘り下げていく対談集です。読んでみると、次第に自分と相手との境界線が曖昧になっていくような感覚になります……。
- 914.6-ム 『となりの脳世界』 村田 紗耶香 || 著 朝日新聞出版
→「こそめスープ」を覚えていますか。この本は読めば読むほど「あっ！分かる…そういうことある…」と何度も頷く場面が多々あります。あなたにも思い込みの1つや2つあるのではないのでしょうか。

いちおしなのは…



914.6-ヨ 『吉本ばななが友だちの悩みについてこたえる』 吉本ばなな || 著 朝日新聞出版

例えば、「入学した高校でうわべの付き合いをして疲れています。本当の友だちを作るにはどうしたらよいですか。」「ネット上の友だちには悩みも言えますが、リアルな友だちに心を開けません。」「……このように、「私(相談者)」と「友だち(あなた)」に焦点を当て、作家のばなな先生視点の答えが述べられていきます。ぜひ、読んで確認してみてください。

本で振り返る平成の30年

さて、今回は平成7年から時代と本を振り返っていきましょう。平成7年は、阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件など、今も人々の記憶に深く刻まれている大きな災害や事件の起きた年でした。また終戦から50年という節目の年でもありました。

この年のベストセラー(トーハン調べ)の第1位、第2位は、お笑いコンビ ダウンタウンの松本人志さんのエッセイ『遺書』と『松本』でした。注目したいは、第3位に入ったノルウェーの小説『ソフィーの世界』(ヨースタイン・ゴルデル || 著)です。哲学とファンタジーをかけたこの小説は、世界的なベストセラー本となりました。続く、第4位にも海外文学がランクイン。『フォレスト・ガンプ』(ウィンストン・グルーム || 著)は、小説だけでなく、映画也大ヒットしました。

翌年(平成8年)は文学以外のジャンルの本が上位にきているのが印象的です。第1位は『脳内革命』、『脳内革命2』(春山茂雄 || 著)、第2位は『超・勉強法』(野口悠紀雄 || 著)、第3位が『神々の指紋』(グラハム・ハンコック || 著)と、色々なジャンルの本がランクインしています。また、前年にインターネットの普及にも繋がった大ヒット OS(システム全体を管理するソフトウェア)Windows95が発売されたことを受けて、その入門書である『できるWindows95』(田中亘 || 著)が第18位となりました。本の売れ行きからもWindows95に対する人々の関心がとても高かったことが伝わってきます。今、私たちが当たり前のように使っているインターネットはこの頃に普及の1歩を踏み出していたのですね。

949.6-ゴ 『ソフィーの世界』 ヨースタイン・ゴルデル || 著 NHK出版

14歳の少女ソフィーに送られてきた『あなたはだれ?』とだけ書かれた手紙。戸惑うソフィーに構うことなく次々に届く手紙には、『世界はどこからきた?』『人間って何?』と哲学的な問いが書かれていた。「一体誰が手紙を送ってきているのだろうか」とソフィーは不審に思いつつ、哲学の不思議に興味を持ち始める。そして、手紙の主によるソフィーへの哲学講座が幕を開ける。本格的な哲学の話を通し、ソフィーは順調に哲学の歴史や哲学者たちの考えを覚えていくが、この哲学講座には誰によるどんな目的があるのだろうか。物語が進むにつれ、ソフィーも読者も驚きの事実が明らかとなる。

498-ハ 『脳内革命』 春山茂雄 || 著 サンマーク

この本が出版された1995年6月は、前月にオウム真理教の教祖が逮捕され、エリートや大学生がなぜ洗脳され犯罪に走ったのかと、社会的に不安な時でした。東洋医学と西洋医学を学んだ著者は、病気を未然に防ぐ方法として、脳内ホルモンとプラス発想の効能を説きました。科学的には賛否があるようですが、もっとも多く身体によい脳内ホルモンを出すのが、より高次の欲求と言える自己実現の達成経験という説明は明快で、自身の目指すべき道を教えられた気がしました。実践のための食事・運動・瞑想は、今に通じています。